ダンス・イン・ザ・マフィア　5

ダンス・イン・ザ・マフィア　5

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19036301

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, エク霊

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含みます。今回はエク霊を含みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。倫理がアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ダンス・イン・ザ・マフィア　5

「ネオ・チオード（爪）・ファミリアとの会談にはエクボを連れて行く。留守は任せたぞ、芹沢」
「そんな」
アジトに主要メンバーを集めて話をする霊幻に、芹沢が青い顔をする。
「俺では力不足ですか」
「力不足じゃない。実力不足なんだ」
困ったように霊幻が芹沢に微笑む。
「お前らもそうだ、モブ、律」
不満そうな茂夫と律に霊幻が優しく話しかける。
「『能力』なら、エクボに負けてると思えませんけど。それに、一緒に連れていってくれたらいいじゃないですか。２人で行く必要は無い」
茂夫が食い下がった。
「じゃあ、テストをしてやろう。俺とエクボに銃口が向けられた。モブがしなきゃいけないことはなんだ？」
「そりゃあ、『能力』で敵の銃を取り上げて──」
「不正解だ。エクボならどうする？」
「……敵のドンを殺すなぁ」
やれやれ、と言いたげに答えるエクボにモブが動揺する。
「でも、その間に師匠やエクボが撃たれたらどうするんですか」
「そんなことよりも、敵に舐められた事の方が問題なんだよ。ドンやコンシリエーレに銃を向けるってのは最大限の侮辱だ。おまえがもしソルダートとして付いてくるのなら、お前が守らなくちゃいけないのは俺やエクボじゃなくて『メンツ』だ。このファミリアそのものなんだよ。それを踏まえた上で敵と駆け引きしなきゃいけない。お前はマフィアとしては経験不足だ」
唇を噛んで俯いた茂夫に申し訳なさそうに笑って、霊幻は芹沢に目を向ける。
「芹沢もそうだ。特に今回は相手が知り合いの少年だろ？……芹沢

には殺せない。今回の俺の護衛はエクボしか無理だ」
「ま、ガキどもは家で遊んでな」
「お、俺、殺せます──！」
いつもやっている霊幻の護衛の役目をエクボに奪われたことにひどく傷ついた芹沢が次は食い下がってきた。
「メンツのことも分かってるつもりです。たとえ相手がショウ君でも──」
「芹沢」
霊幻がきっぱりと優しく、突き放すように芹沢の名前を呼ぶ。
「できないことをできると言うな。有象無象のクズを殺しても心が毎回壊れるやつが、罪の無い子供を殺してまとも（・・・）でいられると思ってんのか？ハウスだ、芹沢」
「……はい」
『犬』としてのしつけから抜けられない芹沢は大人しく引き下がる。
それ自体が皮肉にも「実力不足」を現してしまっていた。
「今回の会合そのものが霊幻を狙った罠の可能性もあるが、俺様と霊幻ならなんとか生還できるだろ。でも足手まといがいると困るんだよ。分かるだろ、シゲオ？霊幻はドンよりもお前を守れって言う。俺は護衛対象が倍になる方が困るんだよ。お留守番たのむぜぇ、親友」
「……分かったよ」
以前、チオード（爪）・ファミリアで能力者の茂夫が狙われた時、躊躇いなく霊幻は茂夫をかばい、殺されかけた。茂夫との対話で揺らいだ芹沢がたまたま霊幻を守らなければ、霊幻は殺されていた。
茂夫は霊幻の最強の武器であると同時に、最大の弱点でもある。
それは茂夫も痛いほど分かっていた。
場慣れしていない茂夫は今回は足手まといである。それを茂夫は了承した。
いずれエクボと同じ目線に立ってやる、と闘志を燃やしながらだが。
そんな兄とエクボを律は、感情の読めない目で見ていた。最近『能力』に目覚めたばかりの律は、そんな目をすることが多かった。律

が何を考えているかは、この場の誰にも分からない。それが不気味で、芹沢はちらちらと律を見ていた。

※

マフィア同士の緩衝地帯になっているバーの奥、個室でその少年は待っていた。
「いやあ、今回は本当に、迷惑かけて悪かったよ」
ツンツンと立たせた赤髪に高級スーツを身に付けたネオ・チオード（爪）・ファミリアの幼いドン――鈴木将は、5人の黒服を連れてソファーに腰掛けている。緊張しているのか、トントンとテーブルを指で叩いている。
霊幻とエクボはそれに応対するように、向かい合わせのソファーに並んで座っている。
「和解の申し出はいいがな、あそこまでされて、はいそうですかとは言えないのは分かるか？」
霊幻が困ったような営業スマイルを浮かべる。
「分かってるさ。おい、アレを」
将がパチンと指を鳴らすと、黒服の1人が大きなプレゼント・ボックスを取り出す。
「アンタの所の幹部を殺した黒幕だ」
ぱか、と開いた箱の中の首に、霊幻はエクボに顎をしゃくる。
「……俺が追ってたやつだ。間違いねぇな」
プレゼントの中身をじっくり確認してエクボはそれを受け取る。
「これで手打ちにしちゃあもらえねぇか？本当に勝手にそいつが暴走して抗争にしようと動かれたんだ。俺も困ってる」
とんとん。
将はテーブルを叩き続けながら困った声をだす。
「どうも組織が大きくなると末端まで目が行き届かなくて、腐ってくる――困ったもんだ」
「……いいだろう。そこまでのプレゼントを贈られちゃあ袖にするのも不躾だ。これでネオ・チオード（爪）・ファミリアとレイゲン・ファミリアとの抗争は手打ちとしよう」

とんとん、と霊幻も机を指で叩く。
「話はこれで終わりだな？じゃあ、これで失礼するぜ。悪いが忙しい身でな」
霊幻はコートを翻してバーの個室を後にする。
プレゼントボックスを持ったエクボが後に続く。
「お互い、幸運を！」
声を掛けた将にひらりと手を振って応えた霊幻。
エクボと車に乗り込んで。
「……何話してたんだ？」
エクボに訊かれる。
「何がだ？」
「とぼけんなよ。あれ、モールス信号だろ。お前にずっと別の話してただろ、あのガキ」
「ご明察。さすがエクボだな。内容までは分からなかったのか？」
「俺が習ったのは日本語のモールスだ。イタリア語のは分かんねーよ」
「なるほど」
エクボは元は日本の自衛官──軍人のようなものだった。色々あって、フランス外人部隊に入り、そこも馬が合わず辞めて暇つぶしにギャングの用心棒をやっていた。
超が付く一流の人物である。知識も実力も本物のスペシャリストだ。
そんな人物を手元に置いていられる幸運にいつも霊幻は感謝している。
「俺への依頼だ」
「おいまさか」
「引き受けた」
「またお前は相談も無しに──！」
なんだかんだ、エクボは無理を通してくれるからである。
「チオード（爪）・ファミリアのことは覚えてるか？」
「……能力者のためのファミリア、だったな」
憮然としながらもエクボは霊幻の質問に答える。
「虐げられている能力者に正しい評価を、だっけか、そんな演説を

何度も聞いたな」
能力者の境遇というのは、余り良くない。ただでさえいつ寝首をかかれるかわからないマフィアの世界で、多種多様な能力を持つ人間は恐怖され、その結果子供のうちに殺されて臓器として売られることが多かった。手元に置いて可愛がっている霊幻は、はっきり言って異常なのである。
一般社会でも腫れ物扱いだ。能力者だから、で孤独になることが多い。芹沢もそれが原因で引きこもりになっていた。
それに意を唱えたのがチオード（爪）・ファミリアのドンだった。
「能力者の方がノーマルより優れている」「なぜ能力者が虐げられなくてはいけない」ある意味ごもっとなことをスローガンにしたその組織は、強力な超能力者であったボスの元に賛同者が殺到し、瞬く間にチョウミ・チッタ（市）で１番大きな組織となった。
そこまでは別に良かった。少なくとも霊幻にはどうでも良かった。
だが、ソルダートとするために能力のある子供を攫ったり、寄せ集めの組織のため行儀が悪く（・・・・・）、末端の構成員がレイゲンファミリアのシマで商店を襲ったりするようになったので、対立せざるを得なくなったのだ。
結局話し合いでは収まらず大規模な抗争になり、相手が能力者だから自分が行くと言った茂夫を一旦は見送ったものの、心配になって付いて行った霊幻が茂夫のピンチを助けようとして殺されかけ、それにキれた茂夫によって大規模な能力の行使が行われた。結果チオードのボスは倒され、軍に引き渡されることによって、カリスマを失ったチオードファミリアは空中分解した。熱狂で集まっていた若者の多くは散って行ったが、もはやマフィアの世界にしか居場所が無くなっていた芹沢のような構成員は霊幻がしぶしぶ面倒を見るためにレイゲンファミリアに引き取っている。
「最近やっぱり、能力者の地位向上を諦め切れなかった連中がネオ・チオード（爪）・ファミリアとして集まり始めている。それはいい。まあよくある話だ。問題はドンにふさわしい人物がショウくんぐらいしか居なかったことだ」
前のチオードのドンだったトウイチロウはカリスマ性も高く、能力も高かった。

「自分こそが、と思えど器じゃないやつが隠れてたショウくんを探し出してドンとして担ぎ上げた。……だけど、ショウくんに本当にドンの才能があったことが問題になってる」
ととと、と霊幻が指先を鳴らす。日本語のモールスで『人形』と打ったのでエクボは目を見開く。
「ショウくんを傀儡にしたかったそいつは、ドンとしてファミリアを統率しだしたショウ君が邪魔になってきたんだ。ショウ君は身の危険を感じて、今日俺に逃し屋を紹介して欲しい、報酬ははずむと依頼してきた。どうやらあまりファミリアの中に味方がいないらしい。だから俺に話してきた」
「お前の子供好きは有名だからな……」
「そんなに子供ばっかりベッドに呼んだ記憶はないんだが」
「そう言う意味じゃねぇが、シゲオと律のことはどう申し開きすんだよてめー」
ごほん、と霊幻は咳払いをして誤魔化す。
「とにかく、俺はこの依頼を受けた。詳しくはまだ話せないが、手伝って貰うぞエクボ！」
「あーはいはい。マフィアの勢力図に手ぇ突っ込んでかき回す癖のあるドンに仕えられて俺様ほんっとーに幸せだわ」
「そうぼやくなよ……ご褒美が待ってるぜ？」
ドンの舌が。
ゆっくりと突き出されて、引っ込む。
思わずエクボの喉が鳴った。
「……すっごいの期待してるかんな？」
「そうだなあ、新しいベッドを先に注文しておくよ」
たまらなくなったエクボは前払いに霊幻の顎を持ち上げ、その舌を吸った。
「ん……」
口付けに応えた霊幻がエクボの舌を優しく甘噛みしながら吸い返す。
甘い唾液を一通り堪能して、エクボは名残惜しそうに唇を離した。
「……ひとさまのマフィアの内部事情に手ぇ出す危ない依頼だ。しばらくは芹沢をそばから離すなよ」

「分かった」
「逃がし屋なら俺様にツテがある。それを当たるのでいいな？」
「ああ、任せる」
「……ったく、悪霊使いの荒い雇用主だぜ」
ぶつくさ言うエクボに霊幻は苦笑する。神出鬼没、敵対した相手は呪われたかのように必ず仕留められる。ついた二つ名が『悪霊』なのが、今、霊幻の隣でお節介をやいてくれている男である。
（ホントに俺には勿体ない色男だな）
はたして何処まで俺の身体で繋ぎ止められるか、と考えている若きドンは、思っているよりも悪霊がドンに本気なのを知らなかったりする。ここに恋の女神がいたら、あなたが心配しなくちゃいけないのは、その色男に夢中にさせられることよ、と嘆いた事だろう。
ドンの屋敷に車が着いて、ドンをエスコートしながら降りて先にいったエクボが、のんびりと孤児院を覗きながら部屋に戻ろうとする霊幻へきびすを返して険しい顔でツカツカと早足で歩いてくる。
「？エクボ、どうし──」
「霊幻、ネオ・チオード（爪）・ファミリアのドンが襲われた」
霊幻の瞳孔が開いていく。
「一命は取り留めたが、重体だ。俺たちはこの件からは手を引かざるを得なくなった」
「何いってんの？」
瞳孔を完全に開いたまま、口だけで霊幻が笑って、エクボをひたりと見る。
「ウチの依頼は満足率１００％が売りだ。ショウくんをさらって、隠れ家に送り届けるぞ」
霊幻は手を広げて、踊るように身体をひるがえす。
「そのまえに──

子供に銃口向けた馬鹿に、説教しないとなあ？」

そのあまりにも美しい微笑い方に。

エクボの軍人としての本能が、何故かゾクリと最大限の警告である『恐怖』をもたらした。

続